フィールド（現場）からの風 ㊽

宮田守男

「安曇野」の郷に映える花色を考え続けよう

今日15日は、七十二候では「虹始見（にじはじめてあらわる）」の頃で雨上がりにきれいな虹が見られ、春に初めて見る虹「初虹」と季節感表す名称が付けられている。だが残雪多い山肌からは、陽の光が柔らかいとは感じてはこない。だが安曇野の郷には桜をはじめ花々が春の訪れを強く感じさせてくれる。

日経新聞プラス1が総力編集した、春のチューリップの名所で第9位に評価されたのは安曇野市の国営アルプスあづみの公園。第1位の富山県の砺波チューリップ公園、第2位の長崎県のハウステンボス、第3位の北海道かみゆうべつチューリップ公園、名所をピックアップした風景には再び訪れたいと想わせてくれる。長野県内で唯一選定された国営アルプスあづみの公園の日頃の取り組みに感謝だ。国際品種名登録機関のチューリップ登録品種は7000種以上、毎年100種近くの新種が生まれるとの事だ。新品種と出会える県内観光地が待ち遠しくなってしまう。

「あなたが好きな春の色は」と聞かれ、多くの信州人が答えるのは、穏やかな陽光を優しく受け止めて咲く黄色の菜の花ではないだろうか。詩人の伊藤静雄さんの「朝浅き」の一篇に幼子が摘んできた野草の名を聞かれ、名前が分からず白花、黄花と色で答えた様子を編む一篇がある。この摘んだ草花が何だったのかを想い馳せるのが、心に残る詩なのかもしれない。

ウクライナでの悲惨な状況が切れ間なく伝わってくる。その悲惨な状況を見るのが耐えられなく、テレビチャンネルを切り替えるが悲惨な状況を伝えるのが視聴率確保の必然性なのかと、現代社会の人間性の変貌に驚かされる。以前の日本社会では、悲惨な状況を映像で連続してしまえば、視聴者の心に大きな影響が生じてしまうのではとの考え方が多かったはずだ。

だが悲惨な映像が放映されるテレビ等から伝わる内容は、殺人をテーマにした番組が多く、映像を観ながら犯人探しに夢中になる事が当たり前の文化になり、悲惨な映像が社会問題化すらされていない。またゲームでは、自らの動作で人などを殺戮（さつりく）する事に何とも感じない人間造りがされ、いざ日本人が参戦する戦場でも人間の殺戮を何とも思わない日本人になるのかと恐ろしくなってしまう。

（信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上）

雪の中で育ったニンニクにも陽の光が降り注ぐ